



二圖 ノイン・ウラ古墳出土の漢代のうるし杯

も、それとほとんど同様のものが、コ氏の發掘品中に存する事實である。コ氏發掘のものは樂浪のふん墓から出たうるし杯を見たものは、假令兩者の間に描線の太さにおいての相違が認められるにしても、恐らくたれもそれがほとんど同時代のものなる事を、否むものはあるまい。共存の漢代の織物、または漢代の鏡と認めらるゝものも、またこの見解を助くる材料である。

四

時代はかくの如くにしてほど定め得られるのであるが、これが如何なる民族の墓であるかは今のところ判然定め得べきではない。當時この地方に匈奴種族が勢をおよぼしたことは大體認め得られようが、それにしても種々の種族が、あるいはこれに従ひ、あるひは別に勢力を張つたのであつて、漢史の記載の上から、にはかにこの問題を定めようとする事は危険である。尙更に引續いて出るべき遺物の上からあるひは得らるべき徴證を待たねばならぬ。たゞ注意すべきはイ氏のいふ所によると、コ氏がこれ等の墓から出た頭がいについて、蒙古型よりもむしろアーリヤ型に屬するものと考え居る事である。匈奴が如何なる種族に屬するかは東洋史學上の長い間の問題である。匈奴もしくは匈奴に類したこの地方の當時の住民が人種學上アーリヤ系に屬すべきものかあるひは矢張り蒙古系のもので、頭がいについてのコ氏の考へが今後訂正せらるゝ日がくるか、それともまた